

## 追悼 岩間吉也先生

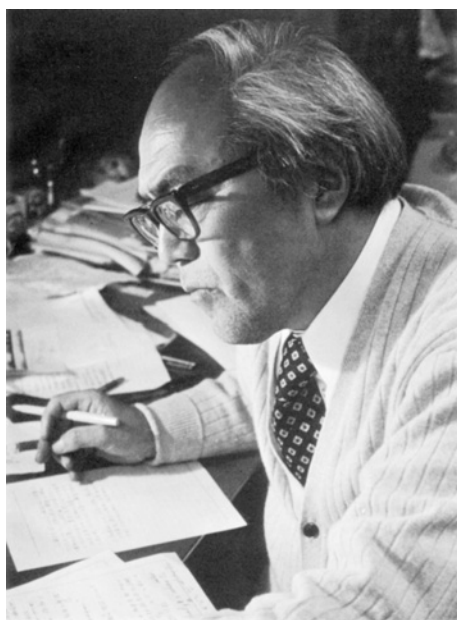
福島県立医科大学医学部神経生理学講座

香山 雪彦

日本生理学会特別会員、大阪大学名誉教授・岩間吉也先生は2010年3月26日にお亡くなりになりました。亡くなられたのが金曜日の深夜であったため各方面への葬儀・告別式の連絡が困難で、失礼してしまった方々も多かったと思うのですが、お許しのほどをお願いいたします。ここに改めてお知らせするとともに、門下生として今一度、岩間先生のご功績などを紹介させていただきたく思います。

岩間吉也先生は1919年に宮城県の阿武隈川の河口に位置します亙理（わたり）町で生まれられました。生家は麴を商っていたとのことですが、子どものころから飛び抜けて優秀で、お父様は当時その町には一人もいなかった医師にして町で開業させたかったらしいと聞きました。その意を受けて岩間先生は旧制第二高等学校から東北大医学部に進まれたのですが、しかし1943年に卒業された時に医師の道は選ばず、本川弘一先生の門を叩いて生理学を専攻されました。

少し話は飛んで大阪大学定年退職の数年前（1980年頃）のことですが、岩間先生は「今だったら医者を選んでいたらかもしれない」と話されたことがあります。それは、大学を卒業された頃の臨床医学はただ経験的で論理的でなかったために全く面白く思われなかった、しかし診断も治療もずいぶん論理的になされるようになった、ということのようです。脳生理学の研究にも数学的・物理学的素養を持ってあたられていたのですが、論理性を非常に大事にしておられました。論文についても、私たちに「大風呂敷を拡げるような論理性を越えるディスカッションをしてはいけない」と戒めておられました。



ついでに少し脱線するのですが、その岩間先生なのに、門下生には物理学、特に電気生理なのに電気に弱い人間が多く、私も最初に「電気が全くわからないのですが、神経生理学をやってもいいでしょうか？」と尋ねました。そうすると、「君はテレビの中身がわかってテレビを見ているか？脳の機能に対する興味さえあればよい。」と答えていただき、それでこの分野を選ぶことになりました。岩間先生の懐の深さを示していると思います。

話を戻して、岩間先生がおられた頃の東北大学・本川研究室は多士済々、後に各地で生理学の教授になられた方々がにぎやかに切磋琢磨されていて、視覚を中心とした感覚生理学や脳生理学の日本における発展の原動力だったと言ってよいと思います。その中でも岩間先生は中心的な存在で、

1950年には助教授になられ、1954年に教授として赴任された金沢大学を経て、1962年に大阪大学に移られました。大阪大学での所属は医学部附属高次神経研究施設・神経生理学研究部（俗称・高次研生理、岩間先生のご退官後まもなく改組でこの名前は消滅しました）ですが、この岩間研究室には門下生が医学部の枠を越えてさまざまな分野から集まり、そこから国外も含めて各地の大学の教授になっただけでも10人を超えるたくさんの研究者が巣立ちました。

岩間先生は門下生たちに多彩な方面への研究の発展を許されたのですが、ご自分の研究も含めて、それらは4つの領域にまとめられます。第1の領域は条件反射とその脳波学的研究で、世界に先駆けて条件反射を神経生理学的立場から追求されました。第2は睡眠・覚醒の神経機構の研究で、特に逆説（REM）睡眠時には脳の興奮性が高まっていることを単一ニューロン活動のレベルで実証、そのうちの視覚中枢の活動は夢の脳内機序の基礎として注目されました。第3はMontreal Neurological InstituteのJasper教授の下でのGABAの中枢作用の研究に端を発する伝達物質の脳内生理機能に関する研究で、青斑核・ノルアドレナリン作動性投射系の研究では一世を画する発展を見せました。第4は視覚中枢の情報処理機構の研究で、これが最終的に研究室の一番大きな柱となりました。

岩間先生は、引退後は近い人との関わり以外にはひっそりと暮らすことを旨としておられるのではないかと周りの人間には感じられていたのですが、同じように現役の頃も、決して自分から表に立とうとはされず、しかし持ち込まれた仕事はどのような場合にも逃げることなく引き受けられました。

例えばこの日本生理学会では1966年から1980年まで常任幹事を14年間、1973年から1980年までJapanese Journal of Physiologyの編集委員を8年間、その間の1973年からの3年間は編集委員長を務められました。編集委員長の時にはたくさんの論文の英文を自ら直すサービスもしておられました。また、日本生理学会大会の当番幹事を1958

年（第35回）と1983年（第60回）の2回にわたって引き受けられました。後者はちょうど大阪大学を退職される時にあたっていて、いろいろお忙しかったと思うのですが、事務局の中心としての役目を果たされました。

大阪大学では1979年から医学部長を2年間務められました。たまたまこの間に医学部所属の臨床医たちに副収入の所得税を申告していない人が多かったことを新聞にたたかれたのですが、「自分には関係しないことなのに」と怒りを見せることもなく、淡々とこの問題を処理されていたとそばで見ていて感じました。

定年で大阪大学を退職された後、70歳になられるまでの7年間は近畿大学薬学部で特任教授を務められ、熱心に講義をされているのが伝わっていました。その後さらに4年間、兵庫医科大学の客員教授を務められましたが、その間の1992年には長年の功績を認められて勲二等旭日重光章を受けられました。

このように言わば功成名を遂げられたのですが、その後も学究心は鳴り止まず、自宅をオフィスとして、大阪大学附属図書館を中心として生理学をはじめ広く自然科学について資料を収集すると共に、深い洞察をもって探求を進められました。それについてはあまり知られていないと思いますので、少し紹介させていただきます。

その一つの成果は1993年のミクロスコピア第10巻3号（p. 178-186）に掲載された「人と時代 Koribinian Brodmann 覚書き」です。そこには脳の研究・教育者なら誰でも知っているゴルジ、ニッスル、ワイゲルト髄鞘染色が並べられた大脳皮質の層構造の図のオリジナルの出典は何なのか、また、これもまた誰でも知っているブロートマン（ドイツ人だから、ブロードマンではない）の領野図になぜ13~16番が書かれていないのか、などがたどれる限りの原典をたどって述べられています。多くの岩間先生の蔵書の中にはブロートマンの1909年のモノグラフ「Vergleichende Lokalisationslehre der Grosshirnrinde」もあるとのこと、そのためもあるのでしょうか、どの教科書よりもきれいなブロートマンの領野図が掲載されてい

ますから、神経生理学専攻の皆様には、学生たちの講義のためにもぜひこのミクロスコピアの論文(論文と言うよりエッセイかもしれませんが)を見てもみることをお勧めします。

さらに特筆すべきは、2005年に「心臓の動きと血液の流れ」(講談社学術文庫)を出版されたことです。これは血液循環説を確立したウィリアム・ハーヴィイの名著「Exercitatio anatomica de motu cordis et sanguinis in animalibus」を、非常に多くの労力と歳月をかけて直接ラテン語から翻訳され、綿密な註をつけて完成させられたもので、学術的な意義が極めて高いものです。翻訳がほぼ完成した段階でも出版を引き受けてくれる会社がなかなか見つからずに困っておられましたが、講談社が引き受けてくれた時には喜んでおられました。岩間先生はかなりの語学の才も持っておられたようなのですが、それにしても相当なご高齢になってからラテン語に挑戦し、いいかげんなどころでの妥協を許さずに学術資料として完璧を期されたのは、頭の下がる思いです。

その後も学究心は止むことなく、しかし穏やかに暮らしておられました。ところが、3月19日の朝、急に脚の力が入りにくくなって、病院での検査でもなかなか何が起きているのかわからなかったのですが、しだいに心筋梗塞であることが明確になりました。それでも回復が期待されていたのですが、ちょうど90歳というご高齢で体力が続かなかったのでしょうか、1週間ほどの入院で亡くなられました。数多い門下生の中でこの冬のお元気だった頃の最後にお会いしたのが私だったこともあって、門下生を代表して皆様にお伝えさせていただきます。

岩間先生は、最初の門下生である金沢大学の山本長三郎先生や大阪に移られて最初の大学院生である笠松卓爾先生の頃には、非常に厳しい人だったそうです。当時の脳波学会で「そんなことは私たちが10年前に発表している」とコメントして、

発表した脳外科医が縮み上がったと聞いたこともあります(そのあとでその人に丁寧に手紙を書き、リプリントを送られたそうですが)。しかし、後期の門下生である私が教えを受けた頃には(学問には厳しいままでしたが)非常に穏やかで、机の横に私たちを座らせて論文はこのように書くのだと教えながら英語を直していただいたりした一方、今はなくなった阪大の中之島のどうにも汚い研究室でみんなと酒を飲み、さまざまなエピソードも聞かせていただきました。若造が生意気な口をたたいても、「まあ、自分がどのくらいのことができるか、そのうちにわかるだろう」と、ただ見守っていただけました。今はただ、心からの感謝を持って、岩間先生のご冥福をお祈りいたします。

(写真は大阪大学教授時代)

#### 岩間吉也先生 略歴

1919年4月	宮城県亘理町に生まれる
1943年9月	東北帝国大学医学部卒業、医師免許
1943年10月	東北帝国大学大学院特別研究生
1945年10月	東北帝国大学助手
1949年5月	医学博士の学位授与
1950年6月	東北大学助教授
1954年12月	金沢大学医学部教授(1963年3月まで)
1962年9月	大阪大学医学部教授(1983年4月まで)
1979年8月	大阪大学医学部長(1981年8月まで)
1983年4月	近畿大学薬学部特任教授(1990年3月まで)
1990年4月	兵庫医科大学客員教授(1994年3月まで)
1992年11月	叙勲(勲二等 旭日重光章)